

木村洋

◆例えば二〇年ほど前と比べると、近代文学研究ははつきりと輝きを弱めたように映る。このあいだ『国文学 解釈と鑑賞』『国文学 解釈と教材の研究』『文学』は相次いで廃刊休刊した(本誌の創刊は頼もしいが)。柄谷行人などの批評家も文学を論じることに関心を失った。志賀直哉、川端康成といった文豪の名前も他分野の関心を引く力を持たない。ひとこと言えば、近代文学研究の趣味化が進んだ。

その中で近代文学研究をどのように持続させるか。この問いはますます重みを増している。どのような方策があるのか。

作家主義、精読主義の研究は休みなく続けられている。しかし「三四郎論」のような徹視的な論文は、夏目漱石の愛好家たちを除けば、「だからどうした」という疑問しか生まれない。文学研究の趣味化への歯止めにはならない。

一九九〇年代後半から二〇〇〇年代に流行した文化研究は、この「だからどうした」という疑問への応答だった。文化研究は社会学や歴史学との新たな協力関係を生み出し、文学研究の存在感を高めることに貢献した。『岩波講座 近代日本の文化史』(岩波書店、二〇〇一〜二〇〇三年)に何人かの近代文学研究者が参加しているのはその一例である。

文化研究とも違う。文学研究の趣味化が進む今、そうした構えは重要度を増している。

近年少ないながらも文学史への意欲を持った成果が見られた。その筆頭が坂口周『意志薄弱の文学史』(慶應義塾大学出版会、二〇一六年)である。坂口は一九世紀末から二〇世紀後半の展開を見渡しながら、意志薄弱をめぐる表現の流れを浮上させる。作家主義や文化研究とも異なる思索態度を鮮やかに示してくれた。また平浩一『文芸復興』の系譜学』(笠間書院、二〇一五年)は一九三〇年代の文学界の流れを手際よく活写する。

◆むろん近代文学研究の趣味化に抗する手立てはそれだけではない。他分野の知見と力を合わせ、文学研究の拡張を図るという手がある。言論史、メディア論と文学研究の融合を試みる大澤聡『批評メディア論』(岩波書店、二〇一五年)はその魅力的な達成だった。しかも大澤は自分の手で理論を作り出す。「パトラーによれば」などと欧米人の名前を得意げに持ち出すだけの凡俗とは異なる姿勢が心強い。検閲については牧義之『伏字の文化史』(森話社、二〇一四年)も出版された。

日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ』(新曜社、二〇一四年)は日系アメリカ移民研究と日本文学研究を合体させる企てとして注目に値する。思想史研究者の長尾宗典は『憧憬』の明治精神史』(ぺりかん社、二〇一六年)で文学の動

しかし文化研究の多くは、文学をナショナルリズムや帝国主義などの一産物としか見なさず、文学を考えることの意味をみずから否定していった。「文学主義」(高橋修「あとがき」、小森陽一ほか編『メディア・表象・イデオロギー』小沢書店、一九九七年、三三六頁)という罵倒語が広められたことはその事態を象徴する。これは社会学流の視線を過度に内面化したことの論理的な帰結だった。回顧すれば、そこで推し進められたのは社会学という帝国の版図拡大だった。

そうした状況を踏まえるとき、文学史研究の意義は高まりつつあるように見える。文学史研究は個別の作家や作品を超えた動き、ある時代をまるごと吟味する営みを指す。そのことは他分野との対話の活性化につながる。例えば文学研究が一九三〇年代論を差し出せば、その試みは政治史や美術史や思想史などの一九三〇年代論との関連を問う作業を惹起せずにはない。文学史が政治史の空白を補った、政治史から新たな刺激を得るような交流がここから始まる。

つまり文学史研究は、文学の学問としての固有性を保ちつつ、他分野との対話の構えを備えている。適度に閉じられ、適度に開かれている。その態度は狭い関心の中で自足する(閉じられすぎている)作家主義や精読主義とも違うし、文学研究の固有性を捨ててかえりみない(開かれすぎている)

きにも目を配りながら、高山樗牛を中心とした明治期の思想の流れを精密に描く。誌友交際という問題領域を浮かび上がらせたことも貴重である。

◆専門家集団だけではなく、広く一般読者に開かれた本を出すことも、文学研究の趣味化への抵抗になりうる。石原千秋『漱石と日本の近代』(新潮選書、二〇一七年)の才気に満ちた分析は、専門家と一般読者とともに惹き付けるに足る。文学の経済学という個人的な研究課題を追求している山本芳明は『漱石の家計簿』(教育評論社、二〇一八年)を出した。平易な文章と行き届いた調査が読者を楽しませる。小平麻衣子『夢みる教養』(河出ブックス、二〇一六年)、滝口明祥『太宰治ブームの系譜』(ひつじ書房、二〇一六年)も一般読者に届きうる言葉で最新の成果を差し出す。

◆「文学」の概念を拡大するという手もある。徳川期に小説は「文学」に含まれなかった。「文学」の意味範囲は固定的なものではなく、時代とともに変わりうる。今後「文学」の研究者がアニメや漫画を分析することが当たり前になっていく可能性が高い。そのことは「文学」の再定義を促さずにはおかないだろう。そうした予感を抱かせる試みの一例が西田谷洋編『文学研究から現代日本の批評を考える』(ひつじ書房、二〇一七年)だった。今後こうしたサブカルチャー好きの研究者たちが、小説と詩歌の分析だけを「文学」の研究者の仕事として見なす固定観念を改めてくれるだろう。

◆文学研究も文を綴るといふ行為で成り立つ以上、文学者の創作と同じように、一つの技藝の営みにほかならない。そのことをとりわけ思い出させてくれたのが多田蔵人『永井荷風』（東京大学出版会、二〇一七年）と村上克尚『動物の声、他者の声』（新曜社、二〇一七年）だった。よく精製された両者の文章は読者の詩心を強く揺さぶる（むしろ分析も優れている）。かつて徳富蘇峰の斬新な欧文直訳体が青年たちを酔わせたように、自分の知見がどれだけ届くかは文の質によってかなりの程度決まる。文学研究の影響力を高める工夫の一例として、多田たちの試みは意義深い。

◆もちろん作家主義、精読主義の研究は、言葉を解釈する技術のいっそうの洗練のために今後也不可欠である。日高佳紀『谷崎潤一郎のディスクール』（双文社出版、二〇一五年）、梶尾文武『否定の文体』（鼎書房、二〇一五年）、小谷瑛輔『小説とは何か？』（ひつじ書房、二〇一七年）、金ヨロン『小説と（歴史的）時間』（世織書房、二〇一八年）あたりを見れば、近年の水準がわかる。その他、松澤俊二『よむ』こと近代（青弓社、二〇一四年）、日置貴之『変貌する時代のなかの歌舞伎』（笠間書院、二〇一六年）、尾崎名津子『織田作之助論』（和泉書院、二〇一六年）、五味湖典嗣『プロバガンダの文学』（共和国、二〇一八年）、田口麻奈『空白』の根底』（思潮社、二〇一九年）のような力作も出た。

◆待たれていた本が出た。高橋修『明治の翻訳ディスクー

## 学界時評 — 国語

### 山田里奈

今回の時評は、二〇一四年一月から二〇一九年三月までを対象とする。長い期間であるため、すべてを取り上げることができないこと、単行本に限定すること、辞典・事典・文法・語彙関連（特に、日本語史や待遇表現）に偏りがあることをご了承ください。

まず、この期間には、二つの学会から辞典・事典が刊行された。日本語文法学会編（二〇一四）『日本語文法事典』（大修館書店）、日本語学会編（二〇一八）『日本語学大辞典』（東京堂出版）である。前者は、「同一の項目を複数の人間が執筆するという事典は、本辞典が最初ではないだろうか（「まえがき」より）」、後者は、「一つの項目の中に十分な情報を含んでおり、ばらばらな知識の集積ではなく、日本語研究の各分野を一つの学的体系として提示している（「刊行のことば」より）」とあるように、それぞれに特色がある。他に、佐藤武義・前田富祺編（二〇一四）『日本語大事典』（朝倉書店）、小田勝（二〇一五）『実例詳解古典文法総覧』（和泉書院）等も刊行された。いずれも今までの研究成果が記述されている。

次に、雑誌の特集で特に目を引いたものとそれに関連する単行本を挙げる。『日本語学』の①『日本語史研究と歴史コーパス』（二〇一四・十一）、②「オノマトペ研究の最前線」（二〇一五・九）、

ル』（ひつじ書房、二〇一五年）は翻訳という営みの豊饒さに気づかせてくれる労作である。飯田祐子『彼女たちの文学』（名古屋大学出版会、二〇一六年）の面白さは「語りにくさ」への着目にある。女たちの雄弁な自己主張に目を向ける研究とは一線を画する構えが目を引く。

◆とくに明治文学研究の界限では、『メディア・表象・イデオロギー』のようにある倫理的な高みから文学者の断罪にいそむ論文が長らく流行した。近年新しい研究の波が押し寄せている。富塚昌輝『近代小説という問い』（翰林書房、二〇一五年）、大橋崇行『言語と思想の言説』（笠間書院、二〇一七年）が代表例である。もはやこの新顔たちの研究はかつての説教口調に囚われていない。落ち着いた思索態度が宿っている。この研究の流れが荒れ果てた明治文学研究を修復していこう。

◆『日本文学』では田中実、須貝千里などが徒党を組んで年に二、三回「第三項」論文で誌面を埋めるといふ異常事態が十数年続いている。この誌面の不正占有のために、すでに十数人の会員が日本文学協会を退会したと関係者から聞いた。田中実たちの凶々しさには驚く。運営委員会はようやく対策に本腰を入れ始めた（『日本文学』二〇一九年三月号の告知文）。会員たちにお願いがあふれる。この誌面不正使用集団の掃討に動き始めた、心ある運営委員たちを全面的に支えていただきたい。（上智大学准教授）

③「敬語研究の新視点」（二〇一七・六）、「国語と國文學」の④「古典語研究の新展開」（二〇一六・五）、「日本語の研究」の⑤「近代語研究の今とこれから」（二〇一五・四）、「日本語文法」の⑥「日本語文法研究と教育との接点」（二〇一八・九）（⑥の特集では、現代日本語文法研究と学校教育（国語・英語）との接点、現代日本語文法研究と日本語教育との接点に大きく分けて論文が書かれている）等を挙げることができる。『国語語彙史の研究』にもこれらと関連するような特集が組まれていた。

①『日本語史研究と歴史コーパス』は第一章でコーパスの説明、第二章で日本語の歴史コーパスの説明、第三章でコーパスを利用した日本語史の具体的な研究が紹介されている。具体的な研究の中には文法史、語彙史、文学史が紹介されており興味深い。関連する単行本としては、二〇一三年より刊行されている『講座日本語コーパス』（朝倉書店）（当期間では二巻から七巻）、近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信（二〇一五）『コーパスと日本語史研究』（ひつじ書房）が挙げられる。後者は「まえがき」に「『日本語歴史コーパス』についての概説書でもあることを意図している」とあるように、近藤泰弘氏により『日本語歴史コーパス』の概要や方法について述べられた後、コーパスを利用した具体的な研究結果が掲載されている。間淵洋子氏・鴻野知曉氏による「コーパス日本語史研究目録」はコーパスを用いて研究する場合やコーパスについて詳しく知りたい場合に役立つと思われる。②「オノマトペ研究の最前線」は山口仲美

アナホリッシュ 國文學 第8号 / 日本文学総合誌

発行日.. 令和1(2019)年11月11日

編集顧問.. 林浩平

編集人.. 佐藤美奈子

編集室.. 〒171-0031 東京都豊島区目白2-27-9-1A

発行人.. 高橋哲雄

発行所.. 株式会社 響文社

〒064-0913 札幌市中央区南13条西13丁目1-15-103

TEL 011-790-8713 FAX 011-790-8714

E-mail [kyobunsha011@gmail.com](mailto:kyobunsha011@gmail.com)

振替.. 2720-4-44538

印刷所.. モリモト印刷株式会社

定価.. 1800円+税

ISBN 978-4-87799-908-7

©2019 by kyobunsha